

昭和四十三年度

秋季公開講演会要旨

大谷大学図書館所蔵の

蔵外チベット文献について

大谷大学教授
文学博士 稲葉正就

大谷大学図書館には、北京版とナルタン版のチベット大蔵経が蔵されている。二種類も揃っているということは世界にも稀な事実である。その中、北京版の方は、一六八冊の近代的な書物の形態を以て影印出版されて、世界の学会に貢献したことは、本学の誇りといっても過言ではなからう。

さて、このチベット大蔵経は、殆んどインドの梵文経論（稀に漢訳その他の経論）からチベット語に翻訳したものの一大全集である。その中には、チベット人が撰述したものは、丹殊爾部（論部）の雑部の中に僅かしか含まれていない。そこで、チベット人の撰述仏典は「蔵外仏典」と呼ばれて、チベット大蔵経とは別に出版されているのである。

それでは、本学図書館に蔵外仏典はないのかというところを決してそうではない。約数百部ほどあり、一部の中に数冊を含むものもあるから、数百部千数百冊も蔵され、数量からいうと、わが国で東北大学と東洋文庫について第三番目のコレクションがあるといえ

よう。それほどの数量を所蔵しながら、旧図書館の書庫の屋根裏に新聞紙に包んで山の如く積みあげて、出し入れも困難な状態で放置され今日まで誰もこれを調査していない。したがって如何なるものがあるのかも全くわからず、いわば未整理の書として放置されていた。

ところで、これらを整理して目録を作ってほしいという要請が、わが国はもちろんのこと欧米のチベット学界からも近年頻りになされるようになった。そこで本年三月から少しづつ調査を始めたのであるが、諸種の事情もあって予定通り進捗せず、まだその半ばであるため、本日その全部を紹介することができないので、いわば中間報告ということになってしまったのは遺憾なことである。しかし文部省の本年度の科学研究費補助金も僅かながらももらえることになったから、この調査研究は、小川一乗講師や栖川隆道大学院生の助力を得て、なるべく早急に完成したい予定である。したがって全部の目録は一、二年の間に何らかの形で発表することにして、いまは取り敢えず調査して見つけ出した中で重要なもの注意すべきものについて少し述べてみよう。

さて、それを述べるに先立って、本学の蔵外仏典類は、どのようにして入手できたのか一言せねばならない。ところが、そのことについての記録は全然残されていないので、ここで明確に申すことは先ず不可能に近い。しかし数量的にいつてその大半は、北京版チベット大蔵経を将来された元本学教授の故寺本婉雅先生が恐らく大蔵経と同時に或はそれに近い時期、すなわち明治の北清事変頃に持ち帰られたものと思われる。また、数量は僅かであるが、寺本先生より少し前に入蔵を企てて途中で生命を落した大谷

派の僧である能海寛氏が送って来たものがあり、それには姓名が記されている。その後、外国へ留学した人たちが外地で買って持ち帰ったもの、またわが国の古書籍店で買ったものなど、以上が入手した経路であるようである。ところで、その大半が寺本先生将来といふことは、先生は青海のクンブム (Kunbum) の学問寺で長く学ばれた関係上、北京からクンブムの間で入手されたものが多いように推定される。したがって北京やモンゴルで上梓されたものが比較的が多い。現在これらの版本は共産圏にあって入手困難である事情からわれわれにとつて貴重性を増したわけである。

それでは、どういふものがあるか、先ず経としては、能海寛氏を送付した金光明経や密教経典があり、紺紙金泥で書写された立派なものではあるが、紙の端の破損が著しく破損していたり、欠如している頁もある。また寺本先生が将来されたと思われる黄紙の立派なものの中には密教の無量寿智経の同一のものが数十冊もある。また能断金剛般若経も存在する。また比較的近年に入手したと思われる賢愚経も異版で二部もある。これらは経であるからチベット大蔵経の甘露雨部 (経部) に収録されており、字句の異同を校合する資料とはなるが、それ以上の価値はない。

次に論では、入中論の註釈が数部あり、昨年ダイラマが来学されたとき、その一註釈書を手にして稀書として長時間それを手離さず熱心に読んでいられた。それは黄紙の版本であるから北中国出版のもので現在インドでは入手できないからであると思われる。また俱舍論の註釈も数部あることも喜ばしいことである。

さて次に、史伝部関係のものとしては、ランダルマ王 *Man*

dar ma (在位841—846 A. D.) の廃仏までの古代チベット研究資料として、蓮華生の伝記と五部教勅がある。五部教勅は、神王・皇后・訳官・大臣の教勅で、古代の王や貴族のことを知る一資料となり、しかも異版で二部も存在する。中世チベット初期に仏教が復興し、古代からのチベット仏教派であるニンマ派と、新たにカーダム派・カーギュ派・サキヤ派の合計四派のチベット宗派が成立するが、その中のカーダム派における重要書であつて、その開祖ドムトン *Hbrum ston* (1005—1064) の著作といわれるカーダム宝冊が異版で二部もある。この書の最初にはドムトンの師である有名なアティシヤ *Atiṣa* (982—1054) の詳しい伝記が収録されている。また、カーギュ派の開祖マルバ *Mar pa* (1012—1097) の伝記と、同派の高僧たちの伝記もあることがわかつた。

さて、チベットは元朝の保護のもとにサキヤ派によって事実上支配されるが、この時代に大学僧プトン *Bu ston* (1280—1364) が出て初めてチベット大蔵経を編纂する。また、プトンの多くの著作はプトン全書として、大蔵経とは別に後代に編集され、それ以後チベットの高僧の著作類が全書として整理されることになるのである。しかし著作の少い人ものは従前通り単行本の形態で出版されて来たことは申すまでもない。

ところで、サキヤ派時代に元朝の熱狂的な尊崇によって却つてチベット仏教は墮落し、次の支配者バクモドウ王朝への交代などの混乱によって墮落は一層拍車をかけられた。そこで仏教の大改革が切実に要望され、ここに立ち上つたのがツォンカバ *Tsong kha pa* (1357—1419) であつて、かれはゲールク派を開き、これ

が後にダライラマの系統の宗派となる。このツォンカパの著作類は後代にダライラマが勢力を得るにしがって最も重要なものとなるが、この全書が本学に存在することがわかった。ツォンカパ全書は先年出版した影印大蔵経の中に収録されているが、それは校正も厳密でなく字句の脱落もあるので、ここに別に全書を具備することは非常に研究に役立つのである。この全書はチベット仏教学研究上最も重要なものであるが、その中には有名なラムリム(菩提道次第論)とガクリム(秘密道次第論)との二大論をはじめとし、中論や入中論の註釈書も含まれていて中観の研究にも有益なものである。またツォンカパの弟子ダルマリンチェン Dharma rin chen の全書も存在するが、そのことは一層ゲールク派仏教学研究に好都合である。後者の全書の中には宝性論の註釈が含まれ、インド大乘仏教における如来蔵思想の研究に裨益するところが多いことは本学の小川一乗講師の最近の一連の論文によってうかがうことができる。

その他の全書も所蔵されているようである。例えば、清朝初期の第七代ダライ(在位1708—1757)の全書が一部だけ見つかった。ということは更に前述以外の全書が蔵せられている可能性を示すことになるであろう。

清朝初期、すなわち第五代ダライから第七代ダライ時代に、ダライが政教両権を把握し確立して行く。それに従ってラマ教学研究も最盛期に入ることになった。したがってこの時代の文献が相当数見出されるのではなからうかと思われる。

ここに、われわれの注意を惹くことは、清朝初期になると数量としては多くないが、モンゴル人がチベット語の典籍を漢訳した

り、漢文の有名なものをチベット訳したりしていることである。その中の一つが西域記のチベット訳で、それが本学の蔵外中に存することは既に佐々木教悟教授によって印度学仏教学研究第二巻第一号に紹介せられたから、ここに再説しないが、それは鮮明な書写本であって恐らく世界唯一の稀本であろう。

このような貴重な稀本が少数でも発見されることを念願しつつ目下調査を進めている次第である。

末筆ながら、これら多くの文献を将来された寺本先生や、尊い犠牲となられた能海師や、文献蒐集に努力して下さった人たちに心から感謝の意を表す。

世阿弥の妙

大谷大学講師 白土わか

世阿弥は、その能楽論、「九位」に、能の位を九に分け、その最高なるものを妙花風と名づけている。すなわち、

九位(妙花風)

新羅、夜半、日頭明なり。妙と云ば、言語道断、心行所滅なり。夜半の日頭、是又言語の及ぶべき処か、如何。然ば当道の堪能の幽風、褒美も及ばず、無心の感、無位の位風の離見こそ、妙花にやあるべき

仏教の思想である妙が、能楽の美の理念、花と結びつくことよって、能楽の最高の美とされること、これは如何なることを示すものなのであろうか。本来、演戯や歌舞は、仏教内において禁ぜ